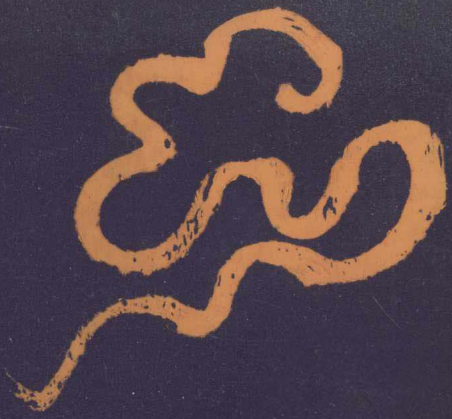

万葉秀歌

上

窪田空穂

著者略歴

明治一〇年生、東京専門学校（早大）卒業
現在　早大名誉教授
芸術院会員
著書　窪田空穂著作集
窪田空穂全歌集
万葉集評釈十二巻
古今・新古今集評釈
源氏物語全訳その他

© 1956, by Utsubo Kubota

昭和三一年九月二〇日　第一刷発行

万葉秀歌上
（日本秀歌1）
定価　二八〇円

著者　窪田空穂
東京都千代田区神田宮本町一〇

印刷者　神田竜一
東京都千代田区神田司町一ノ一六

印刷所　千修印刷株式会社

発行所　東京都千代田区神田宮本町一〇　株式会社　春秋社
電話神田（25）六五七五・四七一五
振替口座　東京　二四八六一

落丁・乱丁本は本社にてお取換します

（文勇堂製本）

序

春秋社の企画として、「日本秀歌」と題し、評釈付きの詞華集が刊行されることとなった。鑑賞を目的として、一般読書界に提供するものとのことである。

筆者は「万葉秀歌」の担任を依嘱された。筆者は大正初期に「万葉集選」と題する小著を刊行したことがある。また近年は「万葉集評釈」(全十二巻)も刊行している。本書は、それらとはかかわりなく、一に筆者現在の鑑賞眼にしたがい、万葉集の短歌から秀歌と信ぜられるものを抄出した。それに簡明を期して評釈を添え、上下二巻としたのが本書である。筆者としては万葉集短歌の秀歌は尽し得たと信じている。

わが国詞華集の鑑賞は、これを前古に比すると、比較を超えるまでに拡大されているが、しかしなお、その過程にある感がする。他方、その需要を満たすに適し

た評釈付きの詞華集は、その類が乏しいうらみがある。筆者は一詞人として「日本秀歌」が読者人の書架にその席を得んことを切望する者である。

昭和三十一年九月

窪田空穂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

万葉集概説……(一)
巻一……(三)
巻二……(六八)
巻三……(一三)
巻四……(一六四)
巻五……(一七五)
巻六……(一八九)
巻七……(二〇一)
巻八……(二二五)
巻九……(二三六)
巻十……(二三五)
凡例……(三)
作者別選出歌……(二四九)
年表

万葉集概説

一

万葉集がどのような歌集であるかということは、ここかしこで説きつくされ、常識となっていて、いまさら説明を要しないほどになっている。しかし、本書は研究書や注解書としてよりも鑑賞書として一般読書層へ提供することを目的としているものであるから、一般読者の便利のために、概説の概説ともいうべき小文を添えることにする。

万葉集は、歌集としてはわが国最古のもので、わが国の古典歌集として国宝中の国宝であり、散文の源氏物語と相並んで、世界文芸の上にもその地位を確保しているものである。

これを形の上から見ると、一部二十巻、歌数は四千五百余首を収めたものである。歌体は、長歌、短歌、旋頭歌（せどうか）、それに発生期の形態としての連歌、および仏足石歌（ぶっそくせきか）体があるが、だいたいは短歌で、その数は全体の九割強を占めている。これは古来試みられてきた幾つかの歌体が、新興の短歌形態に圧倒されたことを示しているもので、言いかえると短歌形態が最も優秀なも

のであることを体験をとおして確認したことを示しているものである。

万葉集は、わが国最古の歌集であるといったが、これは、歌集としてはであって、単に歌としては、それ以前のものがある。古事記、日本書紀の中に収められている歌が、すなわちそれで、多くの物語の中に、その一部をなすものとして織り込まれているのである。したがってその歌数も少なく、万葉集とは比較にはならないものである。

万葉集に収められている歌は、だいたいどれほどの期間のものであるかというと、政治史的にいうと、大化改新のやや前から、京都への遷都に三十年ほどを残す期間のものである。これを天皇の歴代でいうと、万葉集の巻一と巻二の巻頭を飾る雄略天皇と仁徳天皇の皇后の作を例外として除くと、舒明・皇極・孝徳・斉明（朝飛鳥）、天智・弘文（朝近江）、天武（朝飛鳥）、持統・文武（朝藤原）、元明・元正・聖武・孝謙・淳仁（朝奈良）の十四代にわたってのものである。奈良朝としてはそれに次いで称徳・光仁の二帝があるが、その時代の作は収められていない。これを西暦でいうと舒明天皇の即位が紀元六二九年、万葉集最後の歌が淳仁天皇の天平宝字三年の作で、紀元七五九年であり、その間百三十年であるが、実際はそれより短いのである。

これをさらに、時代と作者の明らかな作品について見ると、孝徳天皇（六四五年即位）以前の作品はきわめて少なく、実質的には斉明天皇（六五五年即位）より淳仁天皇（七五八年即位）に至るまでの百余年間の作

品集といってよいのである。

万葉集の編集者は、厳密には不明であるが、現在ではほぼ見当がつけられている。巻一・二は、同じ人で、人は不明であるが、すくなくとも宮廷に関係のある人が編集にあたったものである。巻三・四・六・八・十七・十八・十九・二十の八巻は、明らかに大伴家持の編集である。巻五は山上憶良か大伴家持。巻十三も大伴家持ではないかという。巻九は高橋虫麻呂ではないかという。残る七巻は諸説があって見当もつけられないが、それらも、少しずつながら歌を集めた文書の類がすでにあって、それを編集し直したものである。

万葉集の文献的方面は以上でとどめる。

二

万葉集の収めている百三十年間の歌は、これを大まかに区分すると、初期、中期、晩期と三つに分けられる。わかりやすいようにそのように分けて、各期を概括していうことにする。

初期は、飛鳥地方に都された舒明、皇極、孝徳、斉明の四帝と、近江の滋賀に都された天智、弘文二帝の時期（六二九―六七二年）である。

初期の歌は概括していうと、わが国の歌の改革期のものである。従来の歌は日常生活に直結

していたもので、何らかの目的をもってよんだものであった。たまたまその中で他に伝誦されるような歌も、それを鑑賞するには、口で謡って耳に訴える謡物という方法をとったのである。したがってその歌を支持するものは集団であった。ところがこの時期には、やや古くから伝わっていた漢文学が、尊重と乱読の結果、しだいに身に着いてきて、その文芸味を歌の上に取り入れることができるようになった時期である。このことは、事の性質上、大まかに感じ取るよりほかないことで、また、その状態も動揺しているものであるが、明らかな傾向だったのである。

この時期の歌は、残っているものが少ない。しかしその少数のものは、ほとんど皆すぐれたものである。作者の明らかな歌としては、舒明、天智の二帝、皇族としては有間皇子、大海人皇子（後の天武天皇）、女流としては天智天皇の皇后（倭姫皇后）、額田王などである。いずれも高貴な教養をもちえた階級の人々で、わが国の歌はこうした階級の人々によって改革されたのである。

中期（六七三―七三三年）は、ふたたび京が大和の飛鳥地方へ移され、清御原に都された（六七三年）天武天皇、さらに藤原に都された持統、文武、元明の三帝、つづいて元明天皇の時代（七一〇年）に京は奈良に移され、元正、聖武とつづく二帝の時期である。ただし聖武天皇の天平五年（七三三年）ころで区切りをつけることとする。

この時期は、万葉集の頂点をなしている。前期からの線に添っての漢文学の摂取は、この時期には可能の限りをつくして、完全に消化してわがものとし、優秀な素質を持った人は、おのおのその個性を発揮して独自の歌境を拓いている。歌人が多く、水準が高まり、これを前代にくらべると、まさに万花群れ咲くさまを現わしている。

代表的な歌人としては、帝では天武、持統、元明の三帝は、すぐれた作をとどめている。皇子では志貴皇子、大津皇子、高市皇子などが卓越した才華を現わしている。また、他の皇子・王のいずれもが文芸の香り高い作の多くを残している。廷臣としての代表的歌人には、柿本人麻呂、高市黒人、山部赤人、ややおくれて現われてはいるが、山上憶良、大伴旅人があり、また、これらに雁行しうる人々も多い。女流としては石川郎女、大伴坂上郎女があり、その他にも相応の人が多い。

最も代表的な歌人は柿本人麻呂である。伝記は不明で、知られていることは、晩年石見国の国庁で、国司の中の一人として、六位以下の身分で死んだということだけである。不明なのは微官で文書に記録される機会がなかったからである。

人麻呂の抱いていた信仰、人生観は、歌の上で知られる。本来信仰心の強い人で、皇室の尊貴、天皇を現神とする信仰は、万葉集中、人麻呂ほど高調している人はなく、万葉集のこの系

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

統の思想で、後世に影響したものは、だいたい人麻呂をとおしてのものといえるほどである。

人麻呂の人生観の中核は、男女相愛の情で、これを生命と等価値のもののように歌っている。この情を歌った作は生命を打ち込んだ感のあるもので、そこには低声のささやきはなく、信仰を現わしているような趣がある。

歌人としての人麻呂をさながらに示しているのは長歌で、その完成者であると同時に終止者で、前後に並ぶものがない。その歌風は従来の謡物(うたいもの)の長所と、漢文学の摂取しうるものとを、融合し調和させたもので、その消息を歴然と示しているが、本書は長歌に触れないことになっているので省く。

短歌は長歌ほどには特長を示していないが、その声調のひびき高く、その具象化の緊密さと、またその自在性の豊かさは、他の追随を許さないものである。これは人麻呂という人は、本来ロマンチストであって、同時にレアリストでもあり、相矛盾するものを破綻(はたん)なく一身に備えていたためである。精神が高揚してくるときは、眼前に幻覚が現われ、そしてその幻覚を現実の物を描くがごとく冷静な手法で描きうる人だったのである。心を動かした対象で、短歌一首をもっては描きがたいものを、直接関係のない他の物に寄せ、声調を主として描くことによって、その対象を暗示する手腕に至っては、古来唯一の人といえる。

人麻呂の歌は、そのほとんど全部が人事詠で、自然詠はきわめて少ないのであるが、文芸的な態度で自然を見、これを純文芸的な歌とするという、この時代としては従来なかった面を開拓したものに、高市黒人と山部赤人がある。黒人は自然に一種の美趣をとらえるとともに、旅愁を通じてその寂しさの面をもとらえ、文芸味ゆたかな歌としている。赤人は、繊細な感性をとおして自然の美趣もとらえているが、好んで入りひたったのは、自然の静かさの面である。それは美趣とか寂しさとかいうものではなく、静寂そのものが言いがたいまでに快い世界であって、そこにひたることが直ちに救いであるような趣をもった歌である。細く澄んだ声調がその気分を具象している。

山上憶良は、上の人々とは全く異なった境にいた歌人である。憶良は漢学者である。古来の神道、新来の仏教に対しても造詣が深かったようであるが、その人生観を決定させたのは儒教で、信仰ではなく道徳であった。公人としての憶良は、儒教的に民を安んずることをもって任とし、私人としてはその子を酷愛することを道とした。したがってよむところの歌は、ほとんど全部それに触れている。これは上の人々の全然触れない対象である。たとえば、上記の人々は、妻の歌をよまない者はひとりもなく、人麻呂など大部分がそれであるが、子の歌は一首もない。男として子の歌をよんだのは憶良が初めてで、そしてその数も多い。

大伴旅人はまさしく代表的な歌人のひとりである。大伴氏は建国以来の名家で、世々武勲を立て、近くは壬申の乱にも功績があったが、旅人の代になると、政治的に藤原氏に圧倒され、老齢の身を太宰帥として筑前へやられ、京へ帰ったころには、ただ閑日を恋う身となっていた。しかし教養高く、詩情ゆたかな人で、たまたまよんでいる歌は、気品の高く、心ゆかしい作のみで、他を引き離している人である。

石川郎女、大伴坂上郎女は、いずれも希有な才女であるが、その才情をしのばせるのは、相聞の範囲の歌のみである。

晩期　七三四―七五九年　は、聖武、孝謙、淳仁三帝の時代である。この時期は、政治的には藤原氏の専制時代となり、同族間で派閥を争う時代となっていた。宮廷をめぐって生活している廷臣は、反抗と保身のための宴を開き、酒宴に不可欠なものとして、宴歌をのみ詠み合っている時期であった。作歌の誘因をなしていた初期の信仰心は薄れ、また中期の、新興時代の鬱勃たる気魄も失せて、社交にせわしい動揺期だったので、これは当然の成りゆきであった。

代表的歌人としては大伴家持、高橋虫麻呂がある。女流には笠女郎、狭野茅上娘子がある。

大伴家持は、上の旅人の子で、天性、きわめて作歌がすきで、万葉集を通じ、比較を絶して多数の歌をとどめている人である。万葉集の編集の上でも、巻一・二を除いての半数は、明ら

かに家持の編集とされているが、その他のものも、自身の作歌の参考として収集したのではないかともいわれている。万葉集の歌を今日に伝えた殊勲者であることは明らかである。その作歌から見ると、正直で心よわく、多感で、政治的には、その家筋の関係から、大伴氏一族の頭梁とされていたが、藤原氏と拮抗する力は全然なく、懊悩と多難の道をたどったのである。

作風は感傷的で、繊弱ではあるが、父旅人に似て気品が高く、それが魅力となっている。独詠には秀歌がある。ゆたかな才分をいだいていて、その本質を発揮し尽せずにいたうらみがある。もっとも、中年以後の作は伝わらないのである。

高橋虫麻呂は、文芸の教養の高く、才分のゆたかな人である。この人は独自の境を開いた。それは古来の伝説を長歌としたことで、珠玉のような幾首かをとどめている。才気縦横、その手腕は非凡なものである。これは長歌というよりも、むしろ国語をもって表現した物語といったほうが実際に近いもので、次代に至って初めて生れた国語の物語の、当時暗黙のうちにいかに要求されていたかを語るようなものである。本書はそれらを省かざるをえないのである。

笠女郎、狭野茅上娘子の歌は、いずれも男に対しての恋の苦衷の訴えであるが、すぐれた多くの作をよんでいる。代表者とするに足りる人々である。

奈良朝の歌は、前代にくらべると著しく下向しているが、これを補って優に一時期たらしめ

ているのは、東国地方の民間に生れた歌である。それは民謡と、防人の歌である。東国地方は、その中央政府との結びつきの上においては、西国地方よりもはるかに遅れていた。中央からは、異国さながらに見られていたかとも思われる。土着の民で文字を読みうるものはきわめて少数で、吏務にたずさわる者に限られていたかにみえる。にもかかわらず、その地方の広範囲にわたって、相当立派な歌が数多く作られ、それが謡物となっていたのである。そしてそれらは収集されて京に届けられており、それが万葉集に収められているのである。

その歌は、いささかの例外的なものを除くと全部短歌であり、内容には野趣をとどめているが、表現は洗練されており、この時期の歌としては、新生面を見いだしている感じのするものである。辺土の土民がどのようにして短歌形式を身につけたかは、奇体に思われもすることであるが、これは文字をとおして覚えたのではなく、京の歌が謡い伝えられ、謡いひろめられて、それを耳に聞いてわが物としたとしか思えないことである。辺土の土民の文芸的素質とその才能のほどのしのばれることである。

この感を最も強くさせられるのは、防人の歌である。防人は太平洋戦争敗戦以前の徴兵にあたるものである。いずれも二十歳前後の壮丁で、ことに東国の者は剛勇であるという意味で徴された者で、作歌というようなことには最も縁遠い者ばかりである。その任務は壱岐、対馬を

主に、辺海の防備に当るのであって、仮想の敵は外敵であって、死を覚悟して当るべき任務であった。中央政府は各防人から、その任務に対する覚悟、あるいは任務を遂行する誓いを得ることを目的とし、それぞれの国庁に命じて歌を作らせようとしたのが本来であったとみえる。

防人の歌は、作歌にたえうる者だけが作ったものである。それが万葉集に収められているのは、大伴家持が中央政府の兵部省の役人として、防人の事務を扱ったところから、その歌を内見する機会を得、一応の選をしたものを手もとにとどめていたがためである。

防人の歌は上の民謡とはちがって、謡い続けられるうちに加えられる辞句の洗練はなく、よみっぱなしのものであるから、修辞の上からは不十分のものがある。しかし緊張した気分をもって、純真な感情をよんでいるので、この当時の東国の壮丁の生地があからさまに出ていて、胸を打つ作が相当に多い。現在かりに、東国の壮丁を同じ立場に立たせ、同じ心からの歌を作らせるとしたら、はたしてどれほどの作が得られよう。その得られたものを、一千年を越える昔のこれらの歌と比較してみて、はたしてどれほどの優位が得られよう。これは昔におもねる心で言っているのではない。当時の東国人の素質と才能の、いかに高いものであったかを言おうとしてのことである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com